慶野義雄教授　略歴・主要著作目録

略　歴

昭和二一年一二月一五日生まれ

［学歴］

昭和四五年三月　京都大学法学部卒業
同四七年　三月　京都大学大学院法学研究科修士課程修了
同五〇年　三月　京都大学大学院法学研究科博士課程中退

［職歴］

昭和四九年三月　防衛医科大学校専任講師
同五九年　四月　同助教授
平成四年　四月　大阪国際大学政経学部教授
平成八年　四月　平成国際大学法学部教授

［平成国際大学での役職等］

教授会幹事、常任委員会幹事、自己評価委員長、総務委員長、教務部長、図書館長、社会・情報科学研究所長、就職委員、学長補佐等。

［学会、社会での活動］

日本政治学会会員、憲法学会常務理事、憲法学会理事長（平成二六年一二月～現在）、日本教師会会長（平成八年八月～現在）、二一世紀日本フォーラム理事、憲法国家理念研究会代表幹事、関西民間憲法臨調幹事、自主憲法制定国民会議顧問、日本会議理事、憲法懇話会会員等。

［主要業績］

（著書）

昭和六三年　『ゼミナール現代日本の政治経済』（共著）ＰＨＰ研究所

平成　二年　『各国政治制度概説』（共著）慶應通信

平成　四年　『現代の民主政治』（共著）嵯峨野書院

平成　五年　『憲法・国家・政治』（編著）嵯峨野書院

平成　六年　『国民の政治学――国家への覚醒』（共著）ルーツ出版局

平成　七年　『ゼミナール冷戦後の政治経済』（共著）ＰＨＰ研究所

平成　七年　『デモクラシーと現代政治』（共著）嵯峨野書院

平成　七年　『戦後を超える』（共著）ＰＨＰ研究所
平成　八年　『原爆投下への審判――アメリカの主張と反省』（共著）新盛堂天地社
平成一八年　『国民の政治学――保守主義の真髄』嵯峨野書院

（翻訳）

昭和五八年　『最新軍事用語辞典』（共訳）三修社
平成二四年　『中国人と日本人』（共訳）入江昭編著、ミネルヴァ書房

（論文）

昭和五三年　「立憲的概念としての独裁」『防衛医科大学校進学課程研究紀要』第一号
昭和五五年　「闘争理論と階級――ダーレンドルフの階級理論」『防衛医科大学校進学課程研究紀要』第三号
昭和五五年　「自衛隊スパイ事件とプロフェッショナリズム」『改革者』昭和五五年七月号
昭和五六年　「正義の戦争の理論――マルクスとレーニンの場合」『防衛医科大学校進学課程研究紀要』第四号
昭和五六年　「所謂解釈改憲について」『教育月報』第二一〇号
昭和五八年　「比例代表制の政治理論的考察」『防衛医科大学校進学課程研究紀要』第六号
昭和五九年　「職業倫理としての政治倫理――マックス・ウェーバーの所論を参考にして」『防衛医科大学校進学課程研究紀要』第七号
昭和五九年　「吉野作造と明治憲法」『防衛医科大学校進学課程研究紀要』第七号

昭和五九年「大正デモクラシーと立憲主義」『白鴎女子短大論集』第九巻第三号
昭和六〇年「朝日新聞変造の無節操」『知識』一二月号
昭和六一年「現代における天皇機関説事件」『自由』二月号
昭和六一年「新聞倫理と記事の修正」『防衛医科大学校進学課程研究紀要』第九号
昭和六二年「宗教の自由と政教関係」『白鴎大学論集』第一号
昭和六二年「公民宗教の理論と靖国問題」『防衛医科大学校進学課程研究紀要』第一〇号
昭和六二年「おかしいゾ国民不在の総裁選」『正論』九月号
昭和六三年「民衆主義としての大正デモクラシー」猪木正道先生古希記念論集『現代世界と政治』（現代思想社）所収
平成　元年「神社非宗教論をめぐる憲法思想」中村勝範編『近代日本政治の諸相――時代による考察』（慶應通信）所収
平成　三年「表現者としての天皇――筧克彦の憲法学」『防衛医科大学校進学課程研究紀要』第一四号
平成　五年「皇家の重事と國體の尊厳――国際的観点からの問題の所在と國民の願望について』」『日本及日本人』盛夏号
平成　五年「國體存亡のとき――自民党究極の政治腐敗が『首相公選を考える会だ』」二一世紀日本フォーラム創刊号
平成　五年「テレビ朝日の傲慢――政治的動機による操作は違法」『文武新論』第二九号
平成　六年「日本の政治はどこへ行く」『時事評論石川』第四八六号

平成　六年　「政治改革と国家のアイデンティティー」『かくしん』一二月号
平成　六年　「護憲宣言・読売改憲試案批判」『月曜評論』一二三〇号
平成　七年　「日本国憲法と國體」『憲法論叢』第二号
平成　八年　「首相公選制と國體――首相公選制の批判」『憲法研究』第二八号
平成　九年　「役割を終えた教科書検定」『改革者』四月号
平成　九年　「しなやかなファシズム――民主党現象の深層心理」『日本及日本人』陽春号
平成　九年　「民主党の研究――ソフトクリーム・ファシズムが議会制民主主義を空洞化する」『日本』五月号
平成一〇年　「我が皇室とイギリス王室の親近性と異質性」『日本』一月号
平成一〇年　「憲法改正論の課題と展望『憲法研究』第三〇号
平成一〇年　「橋本首相における公と私」『日本』六月号
平成一〇年　「開かれた皇室論に優るすめろぎの道」『月刊日本』九月号
平成一〇年　「帝国憲法の非プロイセン的性格」月曜評論
平成一一年　「グローバリズムと国家倫理」『日本』九月号
平成一二年　「国民と教育」『日本の教育』第四八〇号
平成一三年　「精神文化への露骨な政治介入を排す」『日本の教育』第四九一号
平成一三年　「崩壊する政党政治」『日本』九月号
平成一四年　「デス、マス調教科書がもたらす思考停止」『日本の教育』第五〇二号
平成一四年　「危機に瀕する言論環境――言論・学問の自由を支えるもの」『日本』一〇月号

平成一五年「教育改革の視点　政治を越えた次元での議論を」神社新報三月一四日
平成一五年「教育基本法改正問題の考え方」『日本』五月号
平成一五年「帝国憲法と現行憲法における所謂『最高機関』について――議会と天皇の地位の不変性」『憲法研究』第三五号
平成一五年「憲法と非常事態規定」『平成国際大学研究所論集』第三号
平成一五年「帝國憲法と日本の理想」『日本』一二月号
平成一六年「新教育基本法大綱の暴走を諫める　日本教師会改正試案に沿って軌道修正を」『日本の教育』第五二二号
平成一六年「（続）新教育基本法大綱の暴走を諫める　愛国心と教育基本法改正問題」『日本の教育』第五二三号
平成一六年「保守勢力に蔓延する教育勅語への誤解」『若楓』第四五号
平成一六年「『不当な支配』と教育基本法改正問題」『平成国際大学研究所論集』第四号
平成一七年「教育勅語制定当時の教育論争――立憲政体の観点から教育基本法改正問題を論ず」『平成国際大学研究所論集』第五号
平成一七年「国家理念不在の自民党改憲論――憲法改正草案大綱（平成一六年一一月案）を徹底解剖する」『日本』五月号
平成一七年「改めて問う　民主党に政権は担えるか」『正論』一二月号
平成一七年「無神経な皇室典範改正論議を諫める」『八重垣』第一五号
平成一八年「危機に立つ君主制を按ず――急がれる政治改革のための発想の転換」『日本及日本人』新春号

平成一八年「方向性を失った教育基本法改正論議」『日本の教育』第五四四号
平成一八年「〈続〉教育基本法改正問題の考え方——立憲政体と教育」『日本』九月号
平成一九年「教育基本法改正の総括」『日本の教育』第五五五号
平成一九年「憲法改正と日本人の美意識」アイデンティティー第二五号
平成一九年「教育基本法再改正運動に着手せよ」『日本』九月号
平成二一年「衆参ねじれ国会と憲法改正」『日本』五月号
平成二一年「所謂国民主権と教育——井上毅が嘆いている」『日本の教育』第五三七号
平成二二年「地域主権が国を滅ぼす」『日本』七月号
平成二二年「民主党と菅直人氏の原点——松下圭一氏の階級理論」『日本の教育』第五八八号
平成二三年「民主党が進めるマルクス主義の二十一世紀的展開」『日本』四月号
平成二三年「京大事件と立命館大学」憲法研究』第四三号
平成二三年「菅前首相の独裁とローマの独裁官の大きな隔たり——憲政擁護の立場から」『日本』一一月号
平成二四年「大震災で明らかになった政治、文科省、私学の最新事情」『日本教師会研究論集』
平成二四年「船中八策で馬脚を現した橋下『維新の会』」『新風』一九四号
平成二四年「皇室と国家を解体する橋下野望」国民新聞一二月二五日
平成二四年「ポピュリズム憲法論の危険な罠——天皇制解体を招く大阪維新の会『船中八策』」『日本』九月号
平成二六年「両刃の剣の九十六条改正」国民新聞一月二五日
平成二六年「地域主権という悪夢—ウクライナの悲劇の教訓」国民新聞六月二五日

平成二六年「愚かなり！九十六条先行改正論――奇策に溺れ遠のく九条改正」伝統と革新』一四号
平成二六年『教育勅語渙発に現れた立憲政体構想――その発表形式を巡って」『平成国際大学研究所論集』第一四号
平成二六年「迷路に嵌まった憲法改正運動――国民主権で左翼と競う知的退廃」『日本』六月号
平成二七年「『国権の発動たる戦争』の本歌」『憲法研究』第四七号
平成二八年「憲法九条全面廃棄で主権回復を」アイデンティティー第八〇号

［その他］

昭和六〇年『科学大辞典ＭＥＧＡ』（共著）講談社（軍事関連一二九項目の執筆）
昭和六〇年「民主主義の品位」『正論』五月号（エッセイ）
昭和六〇年「市村真一『徳育の欠如』」『正論』七月号（書評）
昭和六〇年「自由と民主主義の擁護」『世界と日本』七〇二号（書評）
昭和六二年「政治蚊に読んでもらいたい不器用さのすすめ」『世界と日本』八〇八号（書評）
昭和六三年「ペレストロイカの正しい読み方」『世界と日本』八五二号（書評）
平成　二年「イデオロギーと政治宣伝の本質明かす」『世界と日本』九三四号（書評）
平成　三年「中村勝範『正論・自由第八巻』アメリカは世界のナンバーワン」の書評、『世界と日本』一〇六三号
平成　三年「深い洞察と平易な解説」猪木正道『政治の文法』の書評、『正論』一一月号

平成　四年　「共同研究――冷戦以後」中曽根康弘他著の書評、『正論』五月号
平成　四年　「健全な国家観の恢復を訴える好著　小堀圭一郎著『さらば敗戦国史観』の書評」二一世紀日本フォーラム創刊号
平成　八年　「アメリカもまた特殊である」吉田和男著『日米不公平論』の書評、産経新聞一〇月三日
平成　九年　「天皇では大きく違わない二つの憲法」産経新聞二月一四日
平成一五年　日本教師会叢書第二六集『教育基本法改正案――教育の再建に向けて』
平成一六年　日本教師会叢書第二七集『改定　教育基本法改正案――教育の再建に向けて』
平成一七年　「対談・教育基本法を考える『道徳を法文化するのは矛盾』」『こころ』八〇号
平成一九年　「特集　もしアメリカにああ言いわれたらこう言い返せ　靖国参拝は駄目、遊就館の歴史観は反米的だと言われたら」『諸君！』一月号

［学会発表］

平成　七年　「首相公選論と天皇制」第七四回憲法学会パネリスト
平成　九年　「憲法改正論の課題と展望」第七七回憲法学会パネリスト
平成一四年　「『国権の最高機関』としての国会」憲法学会報告
平成二〇年　「明治憲法と国の柱」憲法学会パネリスト
平成二二年　「京大事件と立命館大学」憲法学会報告
平成二七年　「『国権の発動たる戦争』の本歌」憲法学会パネリスト